

2019年11月28日

## 意見陳述書

松山地方裁判所民事第2部御中

原告 立田 卓也  
(砥部町・旧広田村)

砥部町旧広田村高市在住の立田卓也と申します。本日の陳述を通して、私個人の複数の立場から伊方原発運転差止への思いと願いとを、裁判官に訴えます。

現在、私は家族4人で、世で言うところの少子高齢化の進む、いわゆる過疎地で暮らしています。都市部から移住して10年経ちましたが、年配者のご逝去と、また地元小学校の閉校も経験し、年々地域から人が減っています。昭和38年、ひと月に渡って降り続いたという三八豪雪の後には、大勢の住民が移住したと聞きます。それでも、長年農作や林業を中心に暮らしてきた地域の方々と付き合いなかで、代々人が根を張って逞しく暮らし続ける様子を見、樋口裁判官の言われた「国富」が此処広田高市にも在ると、今更ながら身に染みんでいます。

//////////

<私は私の地域に暮らす者です>

そんな生活環境の中で、私たち夫婦はプロの人形劇団として、主に県内外の幼保育園で人形劇公演をしてきました。広田に残る民話やファンタジーの楽しさ、親子の愛を伝えてきました。地域では小学校のPTA会長はじめ、行事ごとには家族で参加してき、現在は地域づくりの一環で、木や木のおもちゃに触れてもらう「木育」活動を、地元の協力を得ながら、地域外の親子に遊びにきてもらうなど、公私にわたって子どもと関わることをしています。親子共々地域に育ててもらい、「国富」に養ってもらっている思いです。移住者である私たちも、気付けばこの地に根を伸ばしていました。

ところが約8年8か月前の、福島第一原子力発電所爆発事故による放射性物質の飛散と放射能汚染では、原発周辺地域を中心に、そこに住んでいた人々は「避難」を迫られ、根付いていた人々の暮らしや生業の場を根こそぎ奪った様子を、目の当たりにしました。

私たちは、低線量被曝や、晩発性放射性被害の発症を恐れるため、避難を是としますが、

国政府は安全をうたい段階を追って避難指示を解除し帰還を促しています。目には見えない放射能の被曝が、どの程度までが安全かそれとも危険か、避難するかしないか、という今まで誰も考えたこともなかつたろう事柄で、何が起こったのか。

それは、人が暮らしていく基盤である「コミュニティ」が壊されてしまったのです。他人様は、どこでも避難して生活すればいいと思われるかもしれませんが、移住した私たち家族ですらそれは容易ではありませんし、ましてやそれを、私は高市に住んでいる方々に言えません。でも、それを強いたのが今回の出来事でした。ばら撒かれた放射性物質による放射能被曝の不安が、これまで同じ地域に関わりあって暮らしてきた人々の間に混乱と対立、深い傷をもたらしています。友人の、親子の、夫婦の、家族の間が今もなお裂かれているのです。あまりにも過酷な、今だ且つて日本が体験したことの無いコミュニティの崩壊です。

伊方原発から 50km の地に住む私は、いわゆる立地住民また近隣住民との法的区分には当りませんが、もし、福島第一原発のような事故を伊方原発が起こし、飛散してくるだろう放射性物質は、そのような区別をしないでしょ。

そうなれば、現在の被災地と同じ状態に置かれるのを想像します。私がどんなに危険性を問うても、広田の地域づくりと一緒にさせてもらっている役場勤めの方は、国の指示に従わざるを得ない対応をするでしょう。わが子を通わせている小学校の先生も同じでしょう。関係性は保てないでしょう。この時期山で鈴なりに赤く色付きタダで食べられる柿ももう食べないでしょう。地域のおばあちゃんおじいちゃんからおすそ分けしてもらう旬の野菜を悩みながら捨てるかも知れません。

全て被災地で起こってきた出来事です。私や私たち家族と共に暮らす地域の人たちとの、このコミュニティ「国富」が、原発事故によって壊されるのを、たら・ればの話しだと見逃し、座して待つ者ではありません。

//////////

<私は信仰者です>

私は、所属するキリスト教会団体の中で、ささやかですが、社会問題を聖書的に取り上げていく学びをしています。311 以降は核問題をテーマに、原発事故を身近で体験をされた方を招いての講演会も開いてきました。ひたすら、被災地の声を聞くことをしてきました。裁判官の皆さんは被災者の実際の声をどれだけ聞いたことがありますか？

私の信仰する聖書の中には、「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」という、人間の持つ他者への共感を説いた言葉があります。これは、そうした方がいいよというお勧めではない、キリストが人間にそうしたように、神を信じるあなたがたも共に重荷を負いなさい、という使命です。

そこで、陳述に臨むにあたり、7年に渡る本訴訟で述べられた全ての陳述を声に出して読みました。一人では大変なのでつれあいと二人で、語る者・聴く側を味わってみました。記録や証言、現場に立ち学ぶ「追体験」を通して、その人の立場に立つ、共感する力を人間は持っています。それによって人類は過去の不幸な出来事から学び、それを避け、より良い歴史を積み重ねてきたはずです。

私は、福島第一原子力発電所事故の被災当事者ではありません。ただ、泣く者とともに泣くということ、何も出来ないではなく一緒に泣くことで無関心でないこと。なにせ放射性物質は、原発の賛否や政治的関心の有無を問わず、等しく降り注いだのです。

声に出して読むことで、文字の奥に秘められた思いや、陳述されない言葉の裏に聞こえてくるうめきが、伝わってくるはずです。  
原発立地県に立つ私達が、原発を容認するという事は、福島の人たちをさらに傷つけ、原発は安全、放射能安全だよと迫ることであり、そうして私たちは彼らを無関心の隅に追いやり、あの事故を風化させ、更なる被曝を強要することになっていくのです。それは、共に泣く態度ではなく、聖書でいうところの、強盗に襲われ傷付き倒れた旅人を見捨てる行為に他なりません。

//////////

<私は子どもを育てる責任のある大人です>

当事者の方から伺う話しには、お子さんを大切におもう思いが溢れています。郡山に住まれていたあるお父さん、自宅周辺の除染がされず線量が高く、我が子を屋外で遊ばせてあげられない日々をずっと送っていました。家から近くに見えるブランコにどうしても乗りたいとせがむ我が子、でも長くは遊ばせられない。そこで二人は暗くなってから、人目を忍んでわずかな時間ブランコに乗せてあげたそうです。

私はまた、高知や愛媛での保養キャンプにボランティアで参加させてもらい、志を同じくする仲間と共に、放射能被曝に不安を抱く親子さんと出会ってきました。そこには、わが子を少しでも被曝から逃そうと必死のお母さん達の姿がありました。

どのお母さんも、子どもが保養先の自然の中で川や海や土に触れ元気に遊んでいる姿に安堵の涙をし、またそれが叶わない故郷を思いだし呆然とし、悔し涙を流し、参加者同士が次第に苦悩を語り分かち合えるようになるも、最終日にはまた涙。

私は同じ子を育てる親としての共感とともに、実際に体験してしまった方々は、簡単には言い表せない痛みを抱えさせられていると、一緒に時間を過ごす中で思わされ、私は励ます言葉も見つからないことが度々でした。

子どもとその命を守り育てる責務を持つ親に、こんな思いをさせてしまう放射能被曝とは、いったい何なのでしょう。いつまでこの国は、原子力緊急事態宣言の下に、被災当事者に放射能被曝の不安という重荷を負わせ続けるのですか？ いつ再び、壊れた原子炉から放射性物質が飛散してくるかも分からない、自分の地域に留まらざるをえない方々に、どうか思いを馳せてください。

今でも幾人かのお母さんたちと繋がっており、ある方は脱被曝を求めて闘われています。そのお母さんからのメッセージを読みます。～第一原発から 70 km の距離にある福島市からの避難である為、強制避難を余儀なくされた立場ではない私達ですが、東京へ避難をして、福島で起こっている現実を受け止めることができました。私たちの住む福島市の汚染はひどく、毎時  $24 \mu\text{Sv}$  を観測しました。今思えば、止められたであろう原発に関心を持たなかったことをとても後悔しています。同じ過ちを決して繰り返してほしくない、そう強く思います。福島は事故は現在も進行形です。子ども達の甲状腺検査以外にも毎年血液検査をしています。事故さえ起こらなければと、沢山の涙を見ました。全てを失うことになります。伊方原発運転の差止めを強く願います～

子ども達のこの重荷。何度、彼ら彼女らを抱きしめて、その小さな体に潜むであろう放射性物質を吸い取ってやりたいと思ったでしょうか。

私は、私の子どものためだけに訴えているではありません。人形劇で年間 3 千人近くの愛媛の幼子たちに出会ってきた者として、誰一人をもその将来に、放射能被曝の恐れのある物を与え残す、そんな選択は、私の中には皆無です。したくありません。

//////////

<私はこの時代を生き、つなぐ人です>

私たちは皆、放射能の被害との闘いの最中です。原爆水爆でもたらされた被曝の 20 世紀から、今世紀にあってもなお、命を繋ぐはずのたくさんの DNA が被曝し、命が絶たれています。基準値を越える放射性物質を食べさせられた海の魚たちは子孫を残せているのでし

ようか？ 避難区域で棲息する陸の動物は？降り注いだ放射性物質を拭うことのできない植物は？いつ起こるとも知れない大地震を前に壊れ、被曝させられる恐れのある代物を側に抱えたまま、私たちや地域、自然は生き延びることができるでしょうか。

そんな不安の渦中でも、私は命をつないでこの闘いに勝ちたいのです。なぜなら、原発の電力が無い古から、私の先祖は脈々この私の命をつないでくれたから。「未来に繋がっていく全ての命のために、もう原発は要らない」。この決意を世論に広げる行動を私は続けます。経済活動では自然エネルギーへの転換を選び取ってほしい。政治の面では、脱原発・電力政策の見直しを求め、昨年度末すでに提出されている「原発ゼロ法案」が審議され制定されること。これ以上の被曝とその不安から解放させられる道筋はもう示されています。今この時代に、原発は止めることができるのです。

2011年3月11日に起こしてしまった福島第一原子力発電所過酷事故と現在進行形の禍災をきっかけに、今こそ裁判所・司法の良心を期待します。